

手前行、予不覺從之走、極力奔馳、相去只數武、卒莫能及、小住步、則又轉身舉手招我而笑、又不覺隨之去、經過衢巷、了無所覩、兩傍都作肉紅色、中一線路、亦無一人、惟戴笠者在前、行多時、渴不可耐、見道傍有水急、俛而飲之、初不知其臭穢也、其人來力輓、倏一拄杖、老人喝之、遂不見、予已臥不能起、張目四顧、則闐闐喧填、車馬奔驟矣、但四肢俱軟、欲言舌本強、不可挽耳、後亦平復、無他、清天漢浮搓散人戲編秋坪新

二語卷

〔醍醐隨筆 下末〕一ある人のめしつかひける下女、日くれて閨に入て髪を梳りぬ、灯もなくてくらかりしに、けづる度に髪の中より火焰はらくとおつる、おどろきてとらんとすればきえてなし、又梳れば又出る、螢などのおほくあつまりて、飛散がごとし、件の女はしりてあるじにうつたふ、一家ことくくあつまり見て、ためしなき物のけなりとて、彼女を追うしなふ、女なくくまどひあり、きけるが、如何はえたりけん、富家の妻と成て子孫さかへけるとぞ、代醉編に、王行甫がいひけん、家兄嘉甫が衣を解は、つねに火星まろび出る、又頭を梳れば髪髻の中より晶燄流落す、これは陽氣茂熾の給也、貴徴にあらざれば壽徴なりと有、件の女すこしもたがわす貴徴にやとおぼふ、又博物志に積油満万石、自然生火といへり、むかし晋の武庫やけぬるを、張華油幕万匹を積める故也といふ、此等をもて見れば、女つねに髪に油をつけぬるが、濕熱にむされて髪髻より火星いでけるにや、えからば女ごとにえか有べきに、いづれいぶかしき事也、

〔先哲醫話 上〕和田東郭

一閑齋原松 門人橋詰順治、治一婦人、頭髪發火、每梳之覺火氣、至夜即見光、與三黃加石膏湯、痊予親見一婦、歸家衣裏有爆響、投之暗處、皆見火、此皆肝火之所爲不足怪矣、

〔常山紀談 二十一〕木村成重が首を、御前家康に出すに、髪にたきしめし、奇南香の薰せしかば、御感あり、